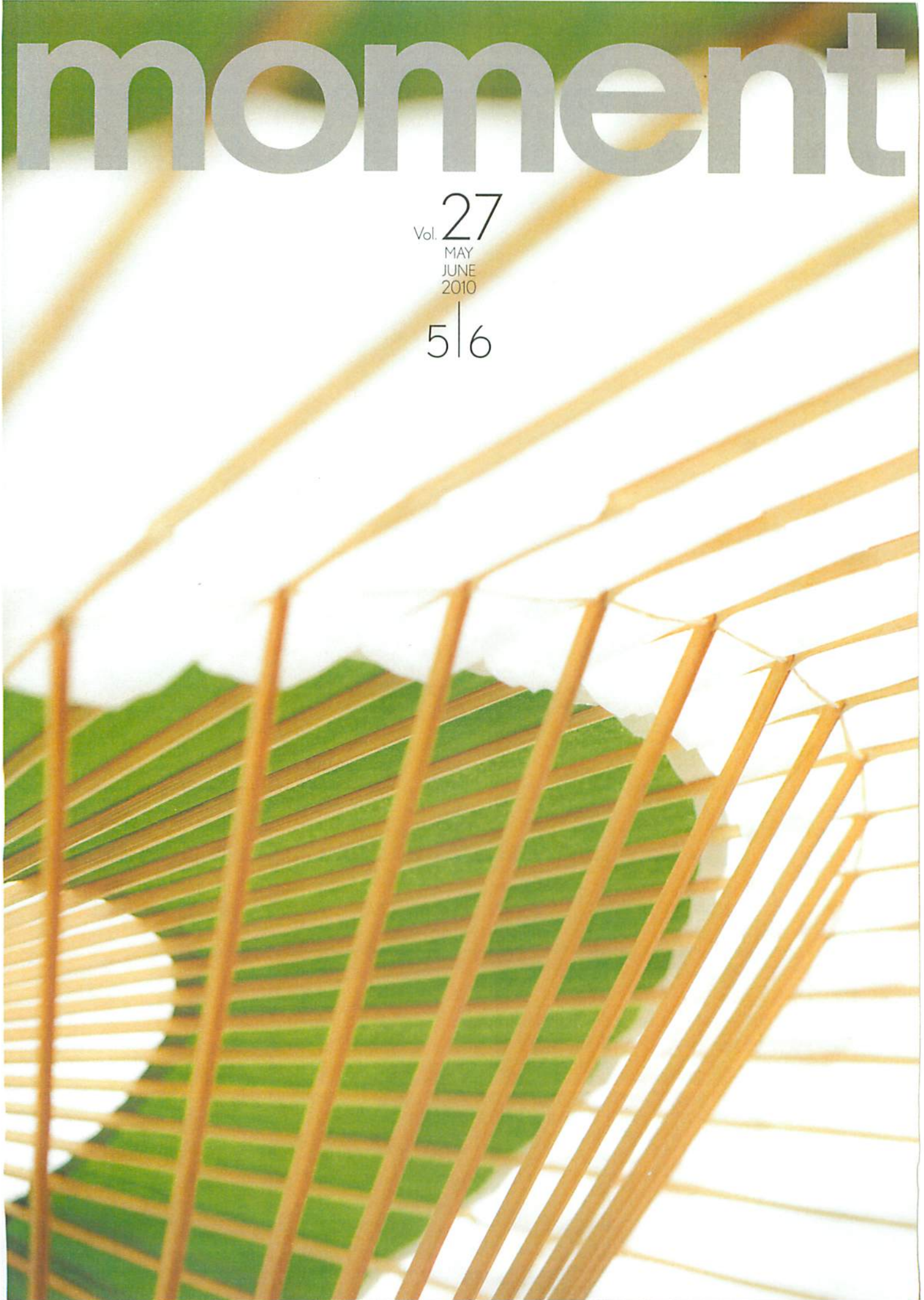


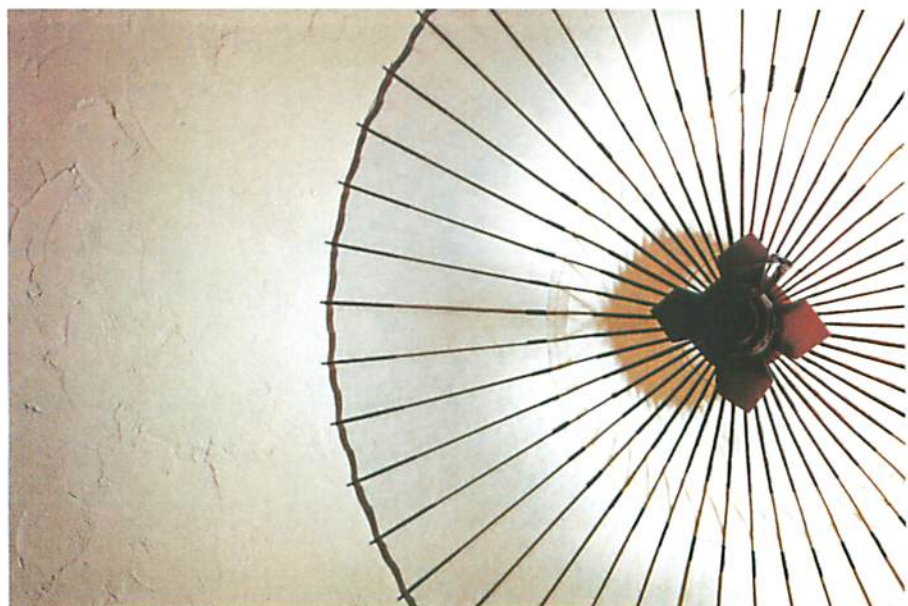
moment

Vol. 27
MAY
JUNE
2010

5|6



[革新を続ける和のカタチ]



開いてかざせば頭上を覆い、雨の季節に欠かせないアイテムである傘。しかし平安時代前後に中国から伝来した当初は雨具ではなく、高位の人物に差しかけ、権威の象徴として使用されたといえます。元来の形状は、柄もない箕や笠のようなもの。閉じることができるようになったのは安土桃山時代以降で、江戸時代後期になってようやく庶民に広まりました。

竹、和紙、木など、日本ならではの自然素材を用い、骨の数も30~70本と非常に多いのが和傘の特徴。見た目の美しさから江戸時代にはファッションアイテムにもなり、日本舞踊

や歌舞伎に取り入れられたのもこのころ。技巧やデザインを凝らした和傘も生まれたといえます。そして、茶の湯と深く結びつき、独自に発展したのが京和傘です。

「表、裏千家に近い当家では、屋外で催される野点^{のだて}で使用される野点傘を、先々代の時代から作らせていただいております。侘び茶の世界にふさわしい、華やかな装飾を排した非常にシンプルなものです」

こう教えてくれたのは、京都にある京和傘の老舗・日吉屋主人の西堀耕太郎さん。和傘はかつて全国各地で作られていましたが、洋傘の普及や生活様式の変化により衰退。

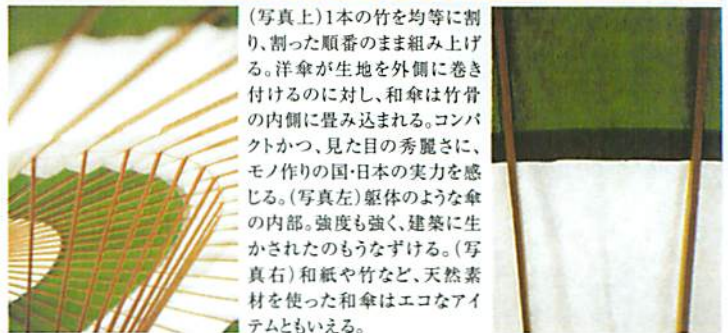
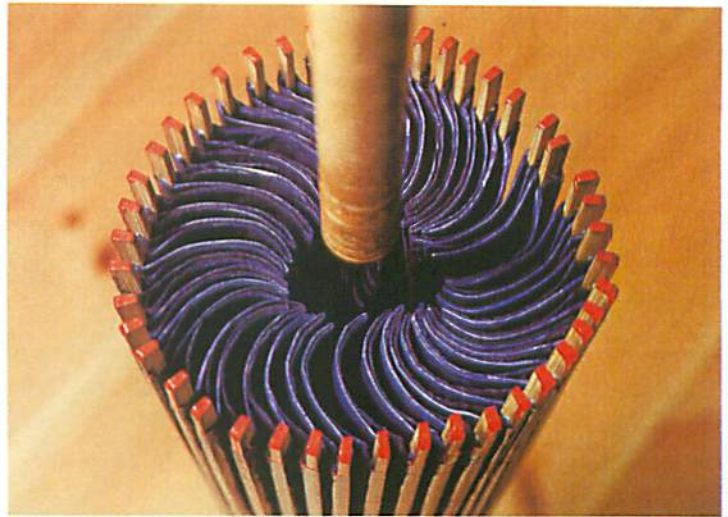


(写真左)竹骨、和紙、木部品など、それぞれ熟練した職人らが手がけた部材を、工房で組み上げていく。数十以上の工程があり、1本の和傘が完成するまでに数週間~数カ月かかるという。
(写真右上)工房で使用される道具の数々。代々受け継がれてきたものは、そのほとんどが職人による手作り。手に馴染む道具が、丁寧な手仕事を支える。
(写真右下)傘の構造の核となる“ロクロ”と呼ばれる部材。滑車のようなロクロに、糸で竹骨を1本1本繋いでいくことで、自在に開閉できる仕組みとなる。





(写真上)和傘の考え方を生かし開発した日吉屋オリジナルの照明器具「KOTORI」。最近ではホテルや商業施設で採用されることも多い。開発に費やした期間は3年。「1300年かけて進化した和傘の伝統と文化がベースにあったからこそ、短期間で作り上げることができたのだと感じています(西堀耕太郎さん)」



(写真上)1本の竹を均等に割り、割った順番のまま組み上げる。洋傘が生地を外側に巻き付けるのに対し、和傘は竹骨の内側に畳み込まれる。コンパクトかつ、見た目の秀麗さに、モノ作りの国・日本の実力を感じる。(写真左)躯体のような傘の内部。強度も強く、建築に生かされたのもうなずける。(写真右)和紙や竹など、天然素材を使った和傘はエコなアイテムともいえる。

主産地の一つであった京都も、現在ではここ1軒が残るのみ。そんな中、西堀さんの工房では、新鋭デザイナーとコラボレーションしたり、新たな素材を積極的に取り入れたりなど、さまざまに工夫しながら商品を開発しています。

「その一つが和傘の機構を取り入れた照明です。もともと和紙を透した優しい光を感じられるのが和傘のよさ。シンメトリーな骨も美しい模様のように。それを普段の生活の中に取り入れてほしいと思い、開発したのがきっかけです」

和傘同様に折り畳むことができるこの照明は、日本ではグッドデザイン賞を受賞し、海外ではドイツの名のあるデザイ

ン賞に輝いたことも。また、例えば建築の世界では、世界的建築家・隈研吾氏のプロジェクトにも参画させていただいたこともあり。時代を超えて今、和傘の可能性は広がりがつつあるようです。

「核にある骨組みの構造と折り畳める機構が、もっとも重要なエッセンス。そこさえ変えなければ、形状や素材、用途は変化してもいいと思っています。伝統とは革新の連続。これからも時代に合わせ和傘を進化させていきたい」

1300年の歴史が宿る日本のカタチに、モノ作りの未来を見たような気がしました。

西堀 耕太郎氏 Kotaro Nishibori

創業100年以上を数える和傘屋・日吉屋の5代目。滋賀県出身の初代当主が、江戸時代後期に京都に店を構え、2代目の時代に茶道三千家に近い現在の地へ。デザインから製作・販売まで手がける工房では、美濃和紙をはじめ、傘に合わせて最高級の和紙を使い分け、竹骨には岐阜真竹や京銘竹、そのほか京漆や京真田紐、数寄屋金具など、吟味した素材や部材を用いて和傘を仕上げる。野点傘のほか、日常使いの傘である番傘や蛇の目傘など、商品アイテムは多数。照明器具「KOTORI」は海外のインテリアデザイナーなどからも高い評価を得る。

http://www.wagasa.com

